



今月の御聖訓



お遠くより多くを賜へども、おまの佛に
おまの心を、おまの心を、おまの心を
おまの心を、おまの心を、おまの心を
おまの心を、おまの心を、おまの心を
おまの心を、おまの心を、おまの心を

凡夫の仏に

なる又かくのごとし。必々三障
四魔と申ス障いできたれば、賢者は
よろこび、愚者は退く、これなり。

【兵衛志殿御返事 全集一〇九一頁】

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
お講講話 「正直の徳について」	菅野憲道 2
家を守る話〔その四〕	松井照雄 8
続・日興上人御本尊調査記録〔九〕	山上弘道 9
「弟子分帳」と十七回忌〔二十三〕	松田銘道 12
合同地区総会特集 〔前編〕	16
所感発表 「教育現場に接して」	栗野広雅 17
「愛犬が臨終にお題目を唱えた」	小林燁代 18
「幸せに感謝して」	宮下留代 19
恵日だより	20
三月の行事 弥生詠草 訃報	



我亦為世父

菅野 憲道

春とは名ばかりの二月のある夕、遠来の友人が訪ねてきた。論談風発して話題は折からオリンピックの日本選手の活躍に話がおよんだ。ことに金メダルの荣誉に輝いた清水選手・里谷選手の二人が、何れも父親を失っていたことは、互いに関心をひいて、あれこれとその心理を詮索もした。

この場合、当人にとって父親が死んで無に帰したのではなく、むしろいつでも自分を見守り励ましてくれる存在として、自分の精神世界では永遠の存在となったのではないか……。現実に生きている父親よりはるかに理想化された存在として本人に大きな影響をもたらしたのではないか……。父を失った悲しみや、父への追悼・思慕・追善の思いがエネルギーに轉換されたのではないか……。また、スタート台に立ったとき、普通の選手ならそのプレッシャーに押しつぶされてしまうのだが、そのある種の孤独から解放してくれたのが、亡き父と共闘し続けるひたむきな思いではなかったのか……。等々。そしてまさしくここに宗教の本質の一端が暗示されているのではないかというようなりとめのない話であった。

「それに引き替え、果たして今の宗教団体は、清水選手一人が、日本人とその社会に与えた感動や感化ほどの良い意味での影響力があるのだろうか？」とふと疑問と反省をもらせば、彼は我が意をえたとばかりに強く同調してくれ、何やらわが教団の現状と己れの無力に、ただ嘆息する他はなかった。

あけて翌日は、新井代議士の自殺が報じられた。この日本という国は主師親を忘れた、精神的に貧困な者こそが上昇して社会の指導層にあるような気がして、なお二月の余寒が身にしみた。春にはまだ少し時間がかかるのかもしれない。風邪を引かないように用心しなくてはと思う昨今である。



お講講話(要旨)

拝読御書 「諫曉八幡抄」(全集五八七頁)

正直の徳について

菅野 憲道

《大聖人が懐かれた諸宗への疑問》

日蓮大聖人は、十二才の時、清澄寺に登って学問に励まれ、その後十六才で出家されてから念仏・真言等の修学に明け暮れたようであります。「妙法比丘尼御返事」(一四〇七頁)には、

「幼少より名号を唱へ候しほどに、いささかの事ありて、この事を疑いし故に……」と述懐されておられますが、これは、

「法然・善導が書きをきて候ほどの法門は十七、八の時より知りて候き」(「南条兵衛七郎殿御書」全集一四九八頁)

ともあって、師匠の道善房等が法然流の専修念仏の影響下にあって、大聖人も青年期には念仏を修学していたが、ある事件を契機に不審を抱くようになったというのです。

「いささかの事ありて」とだけ記されて、不審を抱かれた直接的な契機を、詳細には述べておられません。後世の書物には、法然門下の高僧で当時鎌倉中に名の知られた大阿弥という人物の大変悪い臨終の姿によってであったといわれております。大聖人の念仏信仰はこの人物の法系になるといわれますが、

「註画讃」には「大阿臨終、狂乱叫喚、嘔血而死」とあって、鎌倉中の話題になるほど苦悶に満ちた臨終だったので、このことが念仏に対する疑いの契機となったと伝えられています。

少なくとも専修念仏の信仰は、称名念仏によって臨終に阿弥陀や観音・勢至の来迎に預かり、極楽往生を遂げるといふ単純素朴な信仰であって、その現証として、紫雲がたなびくとか弥陀三尊の来迎など臨終の奇瑞が喧伝されていたのです。しかし肝心の念仏行者の臨終の姿は、大聖人にとって見過ごすことの出来ない虚偽に満ちたものでした。

またその後、さらに仏法の修学に励んでいるうち、真言密教に対し深い疑問を懐くようになったといえます。それは当時隆盛を誇る密教等に対して、全くその法験を根本から疑わせる事件でありました。平安中期頃から朝廷では、宇多法皇はじめ多くの皇子が仁和寺(御室)の座主となっており、後鳥羽法皇自身も法体で、深く真言密教に帰依しておりましたから、承久の乱(一二二一年)の時も朝廷側が失地回復を企てて兵を催し、真言・天台・南都六宗等へ院宣を発し、倒幕のため、怨敵降伏

の祈祷を申し付け、大々的な御修法をおこなったのですが、何の祈祷の験もなく、朝廷側は短期間に完敗して北条義時・泰時等に制圧されたのでした。

朝廷がごぞって真言に帰依し、諸山をあげて加持祈祷の秘術を尽くしたのに対し、何の秘法にも頼らなかつた鎌倉幕府にいつも簡単に敗れ去り、後鳥羽・土御門・順徳の三代の天皇が島流しにされたという事実は、天台密教の寺院で修行された大聖人にとって、深刻な疑問となつたのです。

本当に真言密教が力のある宗教ならば、なぜこれを信奉する朝廷がいつも簡単に田舎の成り上がりの武者に敗れてしまうのかと疑問を持たれ、鎌倉・京畿遊学の中で、仏典にその答を模索されたのであります。

このほか、大聖人が青年期の仏道修行の過程で抱かれた疑問には雑修雑行的な仏教界の姿など、真剣に仏道を求めれば求めるほど、現実的な状況は不審を抱かせるものばかりでした。

そこで大聖人は、求道の原点を「依法不依人」（法四依）の遺誡におき、世間の権威や通念によらず、あくまで仏説（經典）によって勝劣を決し、あくまで法（道理）によって正邪を判じられたのでした。そしてそこから必然的に導き出される結論が最勝の經典である法華經至上の信仰でした。

こうした観点に立てば前述のような事件も、結局、法華經の教説を無視したり、曲解するところからおこる悲劇でありましたから、そのような諸宗に対し念仏無間・禪天魔・真言亡国・律国賊の標語をもって答えられたのです。

この四箇格言はまたある意味で、宗祖がいかに正直に法華經



後鳥羽天皇

まに指弾することは、必ず社会全体の強い反発を招く事になり、正直にして不惜身命の行者でなくしてはかなわぬ事でもありません。

しかも正法を蔑如したり、捨棄するような教えは、何なる権威権力のものであれ、これを恐れずに正直に指摘し、折伏することが法華經の説くところなのですから。

この御書中にもはっきりと、

「隠岐の法皇は名は国王・身は妄語の人なり横人なり」
（全集五八七頁）

と、真言密教に深く帰依する後鳥羽法皇をさして、まったく臆するところなく「妄語の人・横人」と断じられております。

《百王思想の基底をなす正直の徳》

ところで、平安から鎌倉という時代は、様々な神仏の託宣集

を読まれ、いかに正直に法華經を實踐されたかという明かしてもあります。当時の社会通念や体制を支える仏教思想は、まったく仏説に反するものでしたが、これをあからさ

・未来記・夢告という形で、時代思想が広まっていた時代であります。後の建武の中興などもこういう託宣が人々の行動に大きな影響を及ぼしているのです。

とりわけ八幡信仰については、例えば「宇佐託宣集」などにおいては、「自分は積尊の垂迹として日本の国に生まれて、日本の国の国王を百代まで守護する」というような神託があったと記されており、また、大隅八幡宮の「石体銘」という平安中期頃の古い書物には、

「日本の応神天皇は八幡神の垂迹であり、その応神天皇は記録によると、四月八日の甲寅の歳に生まれて二月十五日の壬申の日に隠れられた。これは八幡神の本地が積尊であって、積尊が日本に生まれて八幡大菩薩として姿を現されたのであり、その八幡大菩薩がさらに後世に姿を変えて応神天皇として現れ、以後百代の間の天皇を守護していく」というような託宣が当時の社会に流布していたのです。

また、本地垂迹思想といひまして、八幡神の本地が積尊であるとして八幡大菩薩の信仰が盛んになったのは平安中期頃から



「宇佐託宣集」(宇佐八幡宮所蔵)

と考えられますが、これは天台法華の開会思想をもととしているのであります。

このような八幡信仰にともなう「百王守護思想」が時代に受け入れられていたのですが、歴史的現実はいまだ百代に足りない後鳥羽天皇(八十二代)土御門天皇(八十三代)順徳天皇(八十四代)の三代が、承久の乱に敗れて流罪に遭い、また安徳天皇(八十一代)は壇ノ浦の海底に沈み、仲恭天皇(八十五代)もわずか二ヶ月で廃嫡されるといふ厳しいものでした。

そして、これ等の現証からすれば、神仏の威力は虚しく滅びてしまったのではないか、末法思想とも相まって、いよいよ法滅の世になったのではないかという危機意識が時代を覆っていたのでした。

大聖人は法華経の立場から、こうした時代思想との関わりを説かれます。例えば八幡の託宣集の一つに、

「正直の人の頂を以て栖すゐと為し、詔曲てんてくの人の心を以て亭やどらず」(「八幡大菩薩愚童訓」同)

とありますが、もともと八幡大菩薩のみならずすべての神々は、正直の徳を行う人の頂に宿るといふ共通の觀念があります。まして国王たる者はより正直の徳を根本としなければならぬのはいうまでもありません。

本来、王という字そのものが、天・人・地の三つを縦に一本貫くという形で出来ております。これは古代中国からの天道思想等が表現されているのであり、天も社会も、我われが依って立つ国土の三つともを正直という正しい道を買って立つ人を王というのであり、また世の中の中央ということも表しているの

ですから、王は先ず正直でなければならぬのであります。さらには、神々は必ず正直な人を守護するのですから、正直の徳を失えば守護されないという、極めて明快な考え方があったのであります。

このことは、「正直」とか「信」ということが古代から今に至るまで、政まつりごとの基本原則を示しているような気がします。今の時代でも、例えば日本の国では、一応誰でもが税金を払ったり法律を守ったりしていますが、それは仮初めにも政府（為政者）というものを信用しているからで、法律の通りに正直公平にやってくれると思っっていますから、世の中が治まっているのであります、もしこれが不正直だったならば、世の中がおかしくなるのは当たり前のことです。政の根本は、正直で嘘をつかず、公明正大にすることが一番の根本であり、それによって民衆の信頼を勝ち得るのであります。しかし、それが今の日本にはだんだん崩れてきて、当たり前前あきりまへのことが忽ゆるがせになっっているところに大きな問題があるのであります。

経済活動でも、信用・正直ということがベースにあるわけで、虚偽や不正が混じって、信用が失われれば、正常な経済活動は不可能です。今の金融問題が、銀行や証券会社に対する不信が引き起こしているといわれる通りです。

このことは、特に大きな組織、社会的に高い地位にいる人に対してほど、厳格に正直・信というものが求められるべきであり、子供の嘘と銀行の頭取の嘘ではわけが違ふのであります。

「信無ければ道立たず」と申しますが、その一番の基本を忘れているところに、今の日本の病根があるような気がします。

欧米では偽証罪ということが厳しく批判されるのに、戦後の日本においては「嘘」についてずいぶん不感症になっていることも分かります。恐らく現代の日本人ほど、人間として一番大切な、正直の徳を忘れてしまっている国はないのではないかと思っています。

そういう意味でも、このような古代からの政治思想とか、大聖人が仰せになられた「仏法と申すは正直を本とす」という信仰は、時代を超えた普遍的なものであり、我われも心しなければならぬ真理があると思っるのであります。

《八幡大菩薩および諸天の加護》

ちょうどこの「諫曉八幡抄」が書かれた直前に、鶴岡八幡宮が焼亡するという事件があったのですが、それを見た当時の人たちは畏れ戦おのいて、八幡大菩薩は本拠を捨てて去ったのであり、亡国の兆しではないかと思っただようであります。しかし、大聖人は、

「大菩薩は宝殿をやきて天にのぼり給ふとも、法華經の行者日本国に有るならば其の所に栖み給ふべし」(全集五八八頁)とありますように、法華經を持つ者こそ正直の徳を行う者であり、法華經の会座における諸天善神の誓言とも相まって、八幡大菩薩は、法華經の行者の所に住み、必ずその行者を守護すると申されているのであります。

ところで、大聖人がこのように諸天善神の守護について言及されているのは、理由のあることなのです。それは当時、大聖人とその門弟が度重なる迫害を受けて、「現世安穩」どころか

苦難の連続であったことです。これは門下にも多くの動揺と退転を来たし、「現世安穩後生善処」等の経文に反するとの疑念を起こし、かえって大聖人を批判する人すら出てきたからです。

しかし大聖人のお考えはそれらとは違っておりました。大聖人からすればまったくその反対で、ここまでいろいろな大難が競い起こる中を生きてこられたのは、そこそが諸天善神の守護があったからだと考えられていたのであります。爾前の諸宗の教説を敵として、法華経の正義を説くならば「如来現在猶多怨嫉」といって障魔が紛然と競うのはむしろ当然であり、本来ならばとくに迫害にあつて殺され、門下も滅びていたはずなのに、今まで生きてこられたのは諸天善神の守護があったからであるというものです。



八幡信仰の一形態「僧形八幡神座像」

いなむしろ、何なる障魔が競い起ころうとも、それを信の一字によって克服し、始めて「現世安穩」という経文を身をもって実証されたのであります。

《大聖人の現世安穩の確信》

それは、最後のところで、
「天竺国をば月氏国と申す、仏の出現し給ふべき名なり。扶

桑国をば日本国と申す、あに聖人出で給はざらむ。月は西より東に向へり、月氏の仏法の東へ流るべき相なり。日は東より出づ、日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり。月は光あきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり。仏は法華経誦法の者を治し給はず、在世には無きゆへに。末法には一乗の強敵充滿すべし、不輕菩薩の利益此れなり。各々我が弟子等はげませ給へはげませ給へ。」(同)

と申されておりますが、この最後の数行に、大聖人のご本意が明確に示されております。ここでは積尊の仏法は月のようなものであり、月の光は明らかではなく、それはただ在世の八年の衆生を照らすだけであるが、日蓮の三大秘法の仏法は、ちょうど太陽のようなもので、後五百歳、末法万年の長き闇を照らすのであると、月と日との比較で、日蓮が唱うる南無妙法蓮華経こそ日の仏法として、その優位性を示されております。

これはそのまま、積尊は終に法華経を信じない逆縁の謗法の者を救うことはなかったけれども、日蓮はまさにその積尊が救うことができなかつた人々を濟度するために、敢えて而強毒という逆縁をもって下種の南無妙法蓮華経を説き弘めると申されているのであります。それ故に、末法におけるたびたびの強敵出現も、少しもそれは恐れることもないし、それによって自分の志が曲げられることもありません。それらは初めから承知のことであり、むしろ無縁の衆生をして、たとえ逆縁でも仏法に結縁させるために修行しているんだと申されているのであります。ここにご自身の仏道修行の立場を明らかにされる

とともに、諸難から逃れるのではなくむしろ諸難を積極的に意義づけて正面から受け止める信仰を示されて、

「各々我が弟子等はげませ給へはげませ給へ」

と、門下にもこのような信仰姿勢を要請されているであります。

こうした宗祖の教えは、我われに、人間生きていく限り、それぞれの人生において、様々な苦難に出会うのでしようが、徒らに苦難を回避することだけを考えるのではなく、受けるべき苦難は積極的に受け止めて、むしろこれを自身の成長のための試練であり、修行の道場ととらえていくことこそ、賢者の姿であるとして、自ら手本を示されているのであります。

そして人生に処する態度として、苦しいことを避けて安易な道を選ぶのではなく、正直・正法をその基準とすることを教えられているのであります。

またこのようなご文を拝しますと、大聖人という方が、決して一期、一生という、限りある現実相の人生だけをもってとらえられているのではなく、永遠の本仏の寿命という信仰世界の上から、末法万年を見据えて現在の行動を規定するという、広大無辺の境地にあったことが良く分かるのであります。

《まず自己の内面に寂光浄土を築け》

また法華経を信ずるといふことは、自分の名聞名利を遂げるためではありません。たとえ今生はどうであれ、法華経の教えとその道理に従って、正直に自分の一生を貫くという自分の腹が決まったところに、本当の信仰の安心があるのであります。

そこに寿命品に説かている、

「衆生見劫尽、大火所焼時、我此土安穩、天人常充滿」
という仏様の境地があると思うのであります。

これは決して「現世安穩、後生善処」の文字をそのまま解釈して、一般の人が見るように、外形的にはぬるま湯に浸かったような一生で、何事もなく平穩無事で、のほほんと過ごすような人生に見えても、仏様をご覧になるには、決定信の境地からすれば、法華経を信ずる故に、少しの不安もない、現世安穩であるというのであります。

法華経の信仰とは、先ず何よりも己の内面に常住不壞の寂光土を築き上げていくことです。そのためには、「柔和質直者 則皆見我身」とあって、先ず何よりも質直、即ち正直の徳を修行者でなくてはならないのです。

今回の宗門や学会の騒動も、「正直捨方便」の宗旨のはずが、阿部師の血脈問題、創価学会問題等、あまりの多くの不正直を重ねた結果の混乱であることは歴然として思うのです。本尊模刻の問題・血脈相承詐称の問題、何れも政治的・経済的な都合主義で嘘の上塗りをしてきたことは誰の目にも明らかではないでしょうか。

正信の道を志すものは、少なくとも宗祖大聖人の、「ただ正直にして少欲知足……」との仰せを奉じて、諸難を恐れることなく何なる権威権力をも怖れず詔わず、真っ直ぐに精進していきたいのであります。誰が正直であったか、御本尊様・大聖人様は明らかにご覧になっているのであります。

南無妙法蓮華経

(了)

「起きて半畳、寝て一畳」

これは、人が寝起きする、最小限の床面積を云ったものですが、この面積では実際、生活が出来るはずはありません。

家の大きさ(面積)は、建物の外周(縦×横)で出た面積が、平方面積になります。これをさらに三、三で割ると、坪面積になります。これが一般的な、建築面積の出し方です。

ただし、建築面積と床面積は、多少違います。建築面積とは、建物の外周で計り、床面積とは内壁内(トイレ・浴室・廊下などすべて)の一階、二階または三階の全部を、合算したものを云います。これは連棟建てや、マンション等も同じです。



家を守る話(その四)

松井照雄

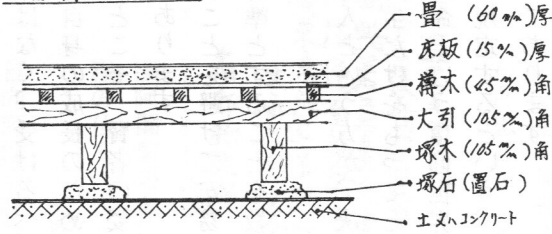
床は大別して二種類です。一に板床(フロアボード)、そしてもう一つは畳床です。貴方の家はどちらが多いでしょうか。

ただしこれは、直に見て接する事の出来る床面ですが、建築家はその下の床材(構造)も、床として考えるのです。(下図参照)

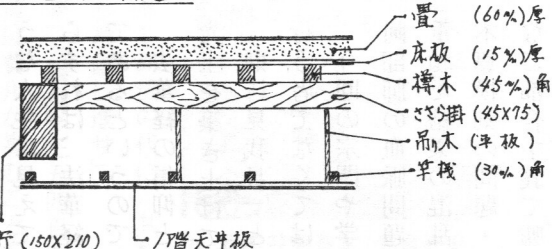
一階は「基礎塚」から始まって「大引」「根太樽木」「床板」「畳またはフロアボード」の順番となり、二階は「ささら掛け」「根太樽木」「床板」そして「畳またはフロアボード」となるのです。畳にしるフロアボードにしる、持ち不持ちは、床下構造の強弱にかかっているのです。早い話が今、畳を新調したとして、その下の床材が腐つて

いたとしたら、新しい畳も支えを失って、たちまち凹み、糸切れを起こしても同じ事です。特に一階にその傾向が多いようです。それは床下構造の違いと、大敵の湿気が床材を弱らせてしまうからです。室内を歩いて、プカプカする所があれば、先ず床下を疑って間違いないでしょう。とりもなおさず、

1階床下構造



2階床下構造



通風、乾燥させる事が、構造材を長持ちさせる第一条件です。次に修理ですが、一階を中心に考えましょう。先ず畳床の場合、畳を上げてその下の床板を外します。(部分的に打ちクギをせず、そのまま外せる箇所がある)そこから床下に入り、プカプカする所を点検します。

塚木が浮いていないか、大引が腐っていないか、樽木が折れていないか等々、修理箇所を確認し、①塚木が浮いている時は、塚石との間に栓を打ち込む。ただし、打ち込みすぎると、他の塚木が浮くので注意すること。腐っている時は取り替えること。②大引および樽木の場合は、上から修理を行う。畳を全部撤去し、床板も全部外す。これで見えぬ、悪い所が全部分かります。ただし、折れは見えぬ時があるので、再度踏んでみる。③取り替え、又は補修が終れば、床板を戻す前に、湿気の有無も調べておく。又その折に、防腐剤の塗布をすると良いでしょう。

次にフロアボード、及びクッションフロア敷きの部屋ですが、この場合はあくまでも、床下からの修理になります。従って他の部屋、つまり畳の部屋または台所の収納庫等で、それが不可能な時は押入の床板を外して入ります。直し方は畳床の修理方法と、基本的には同じです。ただし、材料の持ち込みと修理に、困難をとまなう作業になりますので、これらの事を頭に置いて、準備致しましょう。二階の場合は、すべて床下寸法がありませんので、床下からの作業になりますが、専門家は一階の天井裏から、工事を行う場合もありますので、参考にして下さい。廊下、玄関等もこの手法に準じて行います。台所や浴室、及びトイレ付近の床下は、特に水道の漏水や湿気等に注意し、早めに点検致しましょう。今回は建具の話の予定です。

続・日興上人御本尊調査記録〔一九〕

山上弘道

（平成九年十一月七日）

富士宮市小泉 妙円寺調査）

妙円寺には平成七年に調査に来ている。その時は住職が亡くなられて後住が決まらず奥様がお一人で住んでおられた。日興上人御本尊についてお尋ねすると、今は富士宮市本光寺さんが兼務されておりそちらにあるとのことであった。それ故『日興上人御本尊集』にはその旨を記した。

時移って平成九年十月、これ又平成七年調査をさせていただいた中伊豆菅引の本成寺伊藤地帳師からお電話を戴いた。お話しによると伊藤師は今度小泉妙円寺に晋山したということであった。ついては『日興上人御本尊集』に当寺所蔵の日興上人御本尊が現本光寺蔵と記してある

のは、どこから得た情報ですかと尋ねられた。どうやら、はっきり確認してはいないものの、当寺所蔵の宝物はすべてそのまま御宝蔵にあるようなのである。私は先代の奥さんにお聞きしましたとありていに申し上げると、十一月に御虫払いをしたいと思うので、是非調査をしてもらえないだろうかとのことであった。当方としては願ってもないことで快くお引き受けした。

十一月七日、朝六時朝霞を出発。時間調整をして十時に妙円寺着。岡山から池田・大黒・大谷の三師、そして源立寺菅野憲道師、清水布教所江頭仙道師も来る予定になっている。早速御虫払いの段取りについて妙円寺檀家役員の方々を交えて話し合うことにした。御虫払いはもう随分していないそうで、要領が解らない



山門から本堂を望む（小泉妙円寺）

からお任せしますということであったので、取りあえず先ずは御宝蔵と本堂を拝見することにした。御宝蔵は何年も開けていかなかったわりには整然としており、先代の宝物に対する思いが偲ばれる。本堂に行ってみると、やはり内陣から本堂いたるところに、宝物をお掛けするべく釘が打たれており番号も付されている。先代が作った重宝目録と照らし合わせる的一致しているので、後にご宝物を出して来て、順番に掛けていけばよい。早速御宝蔵から二つの長持ちに入れられた宝物を本堂に運んで番号に合わせて奉掲していった。当方は御宝蔵の掃除、撮影の準備、宝物の確認奉掲と三班に別れ、役員の方々には確認奉掲を手伝っていただいた。三十四幅の重宝は三十分ほどすべて所定の位置に納まり、目録通りすべて現存することが確認された。重宝の主なものを左に紹介する。

※ ※ ※

一、伝日蓮大聖人断簡七字

本文 「俗依之説文作此」

寸法 縦 一二 cm 横 二、五 cm

一、日興上人御本尊(『興本』番号四六)

嘉元二年(一一三〇四)十一月廿日

縦九七、八 cm 横五三、八 cm 三紙

脇書「為駿河國賀嶋庄〇(和(花押))泉

七郎三郎入道息播磨□□(従来は

脇書が読まれていなかった。)

一、日郷師御本尊 康永□年五月廿八日

(康永の下は「二」か「三」と思われる。康永Ⅱ一三四二〜一三四四)

縦四〇、一 cm 横二七、六 cm 一紙

一、日我師御本尊

天正十一年(一五八三)癸未

七月十五日 七十六才

縦四八、二 cm 横二六、七 cm 一紙

脇書「右京阿闍梨本光坊日成学頭職相

続時／授与之／日成八度目登山

也」

備考 本光坊学頭補任の本尊。二日後

に書かれた次項消息に「今度本光

坊学頭御下候」云々とある。

一、日我師消息

(無年号文書) 七月十三日(但し

本文中の「七十六才」との記より天

正十一年(一五八三)となる)

縦一四、二 cm 横四〇、三 cm 一紙半切

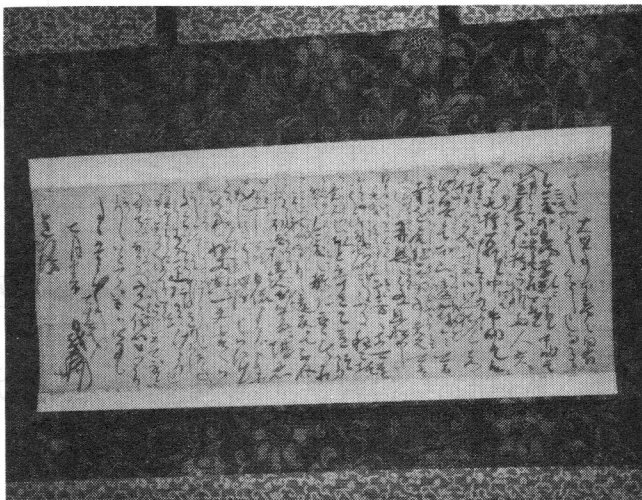
備考「蓮行坊宛」前項御本尊に見られ

る本光坊日成師の学頭補任に付き、日向の蓮行坊に送られた書状である。

※ ※ ※

この他妙本寺十五世日侃師をはじめ歴代の御本尊が多数所蔵されている。

今回の調査で、『日興上人御本尊集』



日我師の貴重な新資料も所蔵されていた

編集時には解らなかつた日興上人御本尊の寸法・脇書が判明し、なおかつ従来通り妙円寺に所蔵されていることが確認されたことは、おおいなる収穫であった。また、日我師の学頭補任に関する本尊・

消息は、日我師が郷門の伝統である本寺妙本寺・代官小泉久遠寺・学頭坊本永寺という格式の徹底をはかったことが、佐藤博信氏等の研究で明らかになっていくが、そうした状況を具体的に裏づける貴重な新資料である。その他の歴代本尊にも妙円寺の歴史を物語る興味深い脇書が見られ、今後の富士門流史研究におおいに資するものである。

写真撮影は一時半に打ち切りとし、残りはまだ来年にということになった。重宝は任職が葬儀で出かけられたので、役員に一体一体確認してもらい、持参した防虫香を丁寧に添えて箱に収めた。御宝蔵に長持ちを運び御虫払いは無事終了した。

今回の調査は妙円寺より依頼されたものであった。こんなことは無論今回が始めてである。今までわれわれなりに信頼を第一に地道にやってきたことが、多少なりとも評価されたのかと思うとうれしさもひとしおである。今後とも更なる精進を期したい。

住職が帰ってこられたので所蔵資料の大まかな説明と、二・三宝物を入れる箱

が無かったこと、その他気が付いたことなどを報告した。詳しい調査報告と写真は後から送ることをお約束し、われわれは妙円寺を辞した。

源立寺さんには今回もいろいろとお世話になった。源立寺さんを新富士までお送りし、われわれは清水布教所に向った。

夜、法暉師がさかんに目を気にしだした。見ると真つ赤に充血している。御宝蔵を開けると、ナフタリンや乾燥剤の化学反応によるものか、目を痛めることがあるということを知っていたので、水泳用のゴーグルを用意していたのだが、想像以上にきれいになっていたのでかけなかったのである。そうこうするうち私もおかしくなってきた。瞼の裏側にぶつぶつができていくようで、目をつぶっていても眼球が動く度に涙が出てくる。ぬれタオルで冷やししながら、いつのまにか寝てしまつて朝になると大分楽になっていた。法暉師は私より重傷で結局帰って目医者のお世話になった。調査にゴーグルは必需品であることを身をもって体験した。それにしても今回の調査はわれわれにとつて忘れ得ぬ、一つの起点となる

べき意義深いものであった。

【訃報】

〔豊中市〕

徳行院法貢信士 行年 五十六歳

俗名 池上 貢之霊 一月二十九日寂

〔池田市〕

正順院法昌信士 行年 五十一歳

俗名 向田昌史之霊 二月二日寂

〔豊中市〕

法隆院松栄妙光大姉 行年 九十六歳

俗名 中堂マツエ之霊 二月十二日寂

なお故人は、元総代、本堂建設委員長を務められた故中堂保治郎氏の夫人です。謹んでご冥福をお祈りします。

【恵日俳壇】

〔宮下留代〕

余寒なほ 身をちぢめて 寺参り

余寒なほ オリソピックの 日章旗



「弟子分帳」と十七回忌（二十三）

松田銘道

り、「立正安国論」と波木井氏

日興上人の申状には、本弟子五人とは違い、当初から「立正安国論」が副進され、また神天上の法門が訴えられています。このことは、大聖人が晩年まで「立正安国論」と神天上の問題を重視し続けられていたことにより、とくに神天上の問題は、「富士一跡門徒存知事」―日興上人の命によって門弟が撰述した書であるが、執筆者は確定できていない―における次の記述が注目できます。

「聖人御在生九箇年の間、停止せらるる神社参詣その年に之を始め、二所三島に参詣を致せり」（『興全』三〇三頁）

ここには、大聖人が身延に在住されていた九力年間、門下への神社参詣が禁止されていた事実が指摘されています。

このことは、波木井氏が二所―箱根権現、伊豆山権現―や三島大社への参詣を企てる謗法行為の背景の一つに神天上法門への疑問―

「原殿御返事」における弥三郎の質問―があげられるものの、その疑問を払拭する何よりも良き事例となっていたはずで。

大聖人が身延に住されていた九力年間、神社参詣が禁止されていた事実と、日興上人の制止を無視して、波木井氏が神社参詣に踏み切ったその背景には、鎌倉の本弟子方が社会状況を巧みに取り入れて国家祈祷や参詣を容認していったこと、そして何よりも身延に在住していた日向師が、国家安穩の祈祷等を行なって、それを目の当たりにしたことが強く影響していました。

日興上人が身延を離山する直接の原因を、こうした日向師の身延での動向に定められていたことは前項にて述べた通りです。そしてそのことは「弟子分帳」における次の波木井氏への記述にもあらわれていると思います。

「一、甲斐国南部六郎入道者、日興の第一の弟子也。仍て申し与ふる所件の如し」

（『興全』一二四頁）

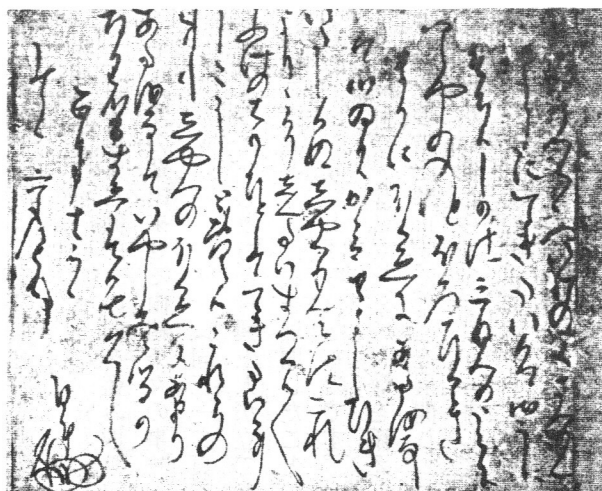
ここには、
a、波木井氏への謗法行為の指摘が無いこと。
b、「日興第一の弟子也」と記されていること。
との特徴がみられます。

aについては、越後房等の弟子・檀越方一名に対して、「但し弘安年中白蓮に背き了んぬ」（『興全』一二二頁）等と、大聖人滅後における信仰の変遷が記されている中で、波木井氏にはその指摘がありません。このことは、改心への教導が身延離山後も引き続き行なわれていたことを推測させますし、それがbの記述ともなっており、あらわれているのだと思われま。

このことは、日興上人が波木井氏に宛てた書状「六郎入道御返事」―『興全』の頭注にも記しているように、六郎入道が波木井実長であるとは名前の一致による推測―からも裏付けることができそうです。

「六郎入道御返事」には「正月十三日」との日付のみで年代は記されていませんが、文末に記された、

「しやう(聖)人のほくゑ(法華)にあまりにあた(怨)をなしていやしみ(賤)候つるかなりつるすゑ(末)にて候也」(同二一〇頁)



離山後の教化をうかがわせる「六郎入道御返事」

との一文から、

- a、大聖人に怨をなした人物が「平左衛門」のことではと推測することができること。
- b、その平左衛門の死去が正応六年(一二一九三)であること。

以上のことが推測でき、正応二年の身延離山

後の書状であると推定できます。

書状の宛名や年代が推定ながらも、実長氏やその一族を日興上人が後々まで教導されていた可能性が知れることは、離山の背景や離山後の波木井氏との関係を考える上で興味深いことです。

さて、波木井氏に神社参詣等、数々の謗法行為を促した日向師が、その後法義に変化が見られることは、⑩の申状において、

「然る間正法を捨離し邪法を興行す。之に依つて守護の善神は国を捨てて相去り、住持の聖人は所を辞して還らず、是を以て魔来たり鬼来たり云々」(『宗全』一―三六頁)との記述によくあらわれています。

正法を捨てて邪法を用いるために「守護の善神」が「国を捨てて相去り」との「立正安国論」における神天上の法門を展開しており、この文言はほぼ日興上人の主張を取り入れた内容となっています。

しかし、こうした神天上法門を展開するようになったきっかけには何があったのか、またその時期はいつかといった問題について検討するにあたって、⑩の申状そのものには日付―嘉歴四年(一二三九)―に検討すべき問題点があります。

申状における日付の問題点とは、上総藻原

寺の過去帳に、正和三年(一一三二―一四)九月三日、同寺にて日向師が入寂―六十二才―したことを伝えていることです。

過去帳の記載に誤りがないとすれば、⑩の申状は日向師の入寂より十五年後の述作となつてしまいます。この場合、

- a、申状の日付そのものに誤りがある。
 - b、過去帳の記載そのものに誤りがある。
- このどちらとも可能性が考えられますが、ともに関連資料が乏しく決め手がありません。

しかし、次の「富士一跡門徒存知事」の記述からは、過去帳の入寂の正和三年より前に、神天上法門を展開し、神社参詣を禁止していた事実を知ることができ、またそれを受け入れた時期や背景もある程度推測することができそうです。関連する記事は二つあります。その一つは、

「一、民部阿闍梨も同じく四脇士を造り副ふ。彼の菩薩の像は比丘形にして納衣を著す。又近年以来諸神に詣ずる事を留むる云々」(『興全』三―三頁)

- a、一体仏に上行等の四菩薩を造り添えるようになった。
- b、神社への参詣を禁止するようになった。

以上二つの事例が記されています。

「原殿御返事」における波木井氏への一体仏の奨励や、神社参詣を容認するといった謗法行為を積極的に勧めていった状況とは異なり、四菩薩を添え、また神社参詣そのものを禁止しています。この事実は⑩の申状における神天上法門をこの時期展開していたことが窺えます。しかししてこの「追加八箇条」そのものは、

「近年以来日興所立の義を盗み取り己が義と為すの輩出来せる由緒条々の事」

(同三一二頁)

とのように、もともと日興上人が立てた法義を盗みとり、己義を展開したことの事例として取り上げられたものです。

日向師が一体仏を廃し四菩薩を添え、又神社参詣を禁止する教えを展開しつつも、尚かつ変わらぬ「己義」が存在していたということは、⑦の申状で天台の立場での法華経を主張していたその教えとの関連が考えられます。

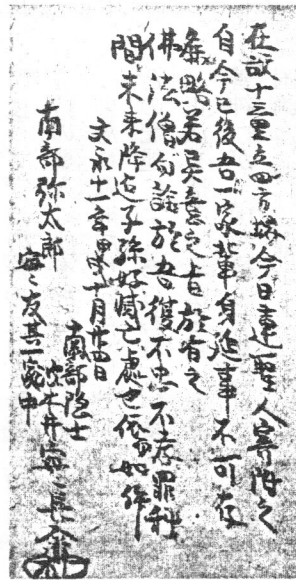
法華経の迹門と本門に勝劣を求めない立場での四菩薩を添えることや神天上法門等の展開であったことが、「日興所立の義を盗み」とつた「己が義」との批判となっている可能性は高いと思われます。

bの神社参詣の禁止については、「近年以

来」と表記されていることから、まずaの受け入れがあつてその後bの展開も加わつてきたのでしよう。

aの問題については、もともと波木井氏その久遠実成の釈尊を造立したいと相談を持ちかけた時に、次のように教訓していた経緯がありました。

「入道殿御微力を以て形の如く造立し奉らんと申し召し候を、御用途も候はずに、大



伝 波木井実長状(久遠寺蔵)

国阿闍梨の奪い取り奉り候仏の代に、其れ程の仏を作らせ給へと教訓し進せ」

(「原殿御返事」『興全』三五四頁)

日向師は立派な造像には費用が高むことを理由に、日朗師が持ち去つた一体仏―大聖人が墓の傍らに立て置くように遺言された隨身仏の釈迦立像で、「御遷化記録」にその旨が記されている―と同等のものでいいだろうと、波木井氏に小規模の一体仏を造像するよう指示していました。

久遠実成の釈尊から一体仏へと、いわば本尊の意識を低下させる指示を日向師は波木井氏に与えてきましたが、この一体仏への志向は鎌倉の本弟子方にも見られました。

日興上人が一体仏の問題を法義上の重要な問題として取り上げられていたことは、「御遺告」の五箇条によつて知れます。そこには、

- 一、大聖御書 和字たるべき事
- 一、鎌倉五人天台沙門謂れ無き事
- 一、一部五種行時過ぎたる事
- 一、一体仏の事
- 一、天目房が方便品を読むべからず立てること大謗法の事

(「御伝土代」『歴全』一一二六九頁)

この遺告が記され、しかもこの五箇条は、「鎌倉方五人並びに天目等あやまりおとし」といへども、まづ十七ヶ条をもつてこれなんは(難破)す、十七の中に此の五つの条等一大事なり、なんぞこれをなんは(難破)しこれをたいち(退治)せん(同二七〇頁)と記述されているように、鎌倉の本弟子五人との間に生じた多くの法義の違いの中でも、特にゆるがせに出来ない問題として特筆されたものです。

さて、「追加八箇条」の記述には、一体仏や神社問題に関しての背景や時期について、

もう少しその動向を窺うことができる次の記述があります。

「一、寂仙坊日澄始めて盗み取つて己義と為す、彼の日澄は民部阿闍梨の弟子なり。仍つて甲斐の国下山郷の地頭左衛門四郎光長は聖人の御弟子、遷化の後には民部阿闍梨を師と為す（帰依僧）。而るに去る永仁年中新堂を造立し一体の仏を安置するの刻み、日興の許に來臨し所立の義に就いて聞き已つて自義と為し候処に、正安二年民部阿闍梨彼の新堂並びに一体の仏を開眼供養す。爰に日澄本師民部阿闍梨と永く義絶せしめ、日興に帰伏して弟子と為る。この仁は盗み取つて自義と為すと雖も、後改悔帰伏の者也」（『興全』三一二頁）

ここには、日向師が一体仏を開眼供養したことがきっかけとなつて、弟子の日澄師が離反し、日興上人に帰依するに至つた経緯が記されていますが、それは順に、

a、下山郷の地頭の左衛門四郎光長が、永仁年中（一二九三～一二九九）に新堂を建立し一体仏を安置。（因みに、左衛門四郎光永は「弟子分帳」に「甲斐国下山左衛門四郎者、因幡房の弟子也。仍て日興之を申し与ふ。但し聖人御滅後に背き了ぬ」（『興全』一二六頁）と記されていて、大聖人滅後、

日永師とともに日興上人のもとから離反しています）

b、日澄師は一体仏だけの安置のあり方に少なからず疑問を懐き、日興上人を尋ねる。

c、日澄師は日興上人の教えを承けたものの、一旦はそれを「自義」として展開。

d、その後、日向師が正安二年（一三〇〇）に一体仏の開眼。

e、一体仏の開眼供養がきっかけとなつて、日向師との間に意見の違いが生じ、日興上人に帰依。

以上の経緯の中で、dで一体仏を開眼供養した正安二年の時点では、日向師が四菩薩を造り添える状況ではなかつた事が知れます。

またbの日澄師が日興上人を尋ねてきたその時期は、おそらく日興上人が「弟子分帳」を作成された永仁六年（一二九八）より前のことではなかつたと推測します。

というのも「永仁」は翌七年四月には「正元」と改元されていることから、「永仁年中」との記述は、永仁六年以前である可能性が高いと考えます。

そして、日澄師のbの訪問やeの帰依からは、身延の弟子方との交流が完全に閉ざされた状況ではなく、aの四郎光長のように日興上人の弟子檀越から身延の日向師に帰依する

人たちがいる一方、日向師の弟子の中からもまた日興上人に相談を持ちかけたり帰依したりする人が日澄師の他にもいたのでないか、そういう雰囲気伝わってきます。

そしてなによりも日澄師の疑問が一体仏の開眼にあつたことからすれば、少なからず日興上人の心の中には、もともと久遠実成の木像を造立したいとの想いが波木井氏にあつただけに、日澄師と同じような疑問を懐く状況下にあると感じとられていた可能性も考えられます。そしてその想いが「弟子分帳」にて波木井氏への記述ともつながつていったのではないか、そう思えます。

それはとくに「日興の第一の弟子也」との表記にも強くあらわれていると思います。

「弟子分帳」で「第一の弟子」と記された弟子檀越は、日興上人の本弟子六人の内日秀師を除く五師と、南条時光、高橋六郎兵衛入道、石河新兵衛入道道念、由井甚五郎、河合四郎光家、新田四郎信綱、波木井実長の七名です。

これらの檀越は、それぞれ一族の中心を為す人たちであり、また「第一の弟子」とはあつても「第二」「第三」との表記が見られないことからして、一族への期待感を込めての表記であつたと受け止めることが出来ます。

「信仰と生活」をテーマに

本年度初の合同地区総会を開催



合同地区総会の後、ご任職を囲んで記念撮影

旭丘・緑丘・服部合同地区総会

二月十五日(日) 午後一時

午後一時より読経・唱題の後、宮崎智和さんと板垣真弓さんの司会で、地区総会は開かれた。尾林講師はこの地区総会で、講員同士の懇談を深め、他人の体験を知って自身の糧とし、信仰の確信をつかんで欲しいと挨拶した。

次に橋本副講師は、信仰と生活を別々の事と思わず、妙法という信仰に生かされている自分、その生活自体が信仰に支えられていること認識する、これが活動方針であると訴えた。

ついで地区役員を代表して、木村春夫(服部)氏が、正信会員として信仰できる喜びを、創価学会時代の生活と比較し、さらなる精進を誓った。そして各地区を代表して、三名の方の所感発表が行われた(別掲)。

その後は、うち解けた雰囲気、各自の自己紹介と質疑応答があり、三時半をもって終了し、地区別に記念撮影が行われた。

※※総会での発言(要旨)※※※※※

*信仰しなければ理解できぬ現象を、社会に訴えるのは信仰者の責任。(旭丘 宮崎)
 *病気の母、年頃の娘と、意にならぬ環境で、いかにして法華経に傷をつけぬ信仰を、志せるか苦悩。(服部 清水)
 *良い死に方は、良い生き方から。(服部 前田)

*八十六歳の人生を、省みて解る信仰のありがたさ。(服部 芝野)

*臨終の時に、悔いのないような信心を。(旭丘 吉田)
 *朝晩の勤行唱題が生活の基本。(服部 福元)

*仕事に信心が反映できる信仰をめざし。(旭丘 板垣)
 *各自の個性をいかにせる信仰を。(服部 横田)



*両親の長寿は私の功德。(緑丘 三好)
*正しい信仰は、正しい現象を示す。

*順風満帆な時にこそ、信仰の必要性を確
認。
(緑丘 多田)



意見を発表する杉野さん。隣は松井さん

*医療における個人の信念と、会社の営業
重視のギャップ克服の体験。(服部 杉野)
*信仰も仕事も、姿で示し姿から学ぶ。

*お経の意味を理解できぬままに勤行して
いるが…。
(緑丘 向田)

※なお、槻木・宝塚・神戸の地区総会の模様は、
次号の掲載になります。

私は現在、高校の非常勤講師として、青
少年の教育に直接現場で携わっております。
新聞やテレビでは、さかんに少年事件

き、本当の改善にはならないのではと、危
惧しております。

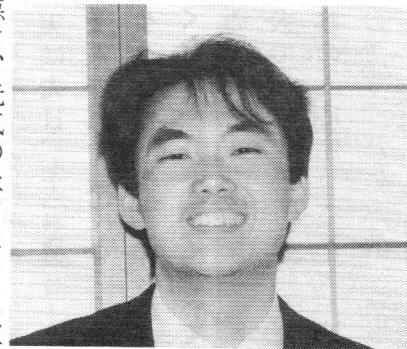
の多発を報道してい
ますが、現場の一員
として、確かに生徒
の無気力、しつけの

これは教育委員会や親の、学校教育に対
する過度の期待感が、なせるわざだと思ひ
ます。子供は学校に入学する以前に、家庭
で生活しているので、そこで人格の形
成も始まっているわけです。だから、入学
してから、教育するのではなく、家
庭における教育、親が子供に接す
る態度を、もっと見直すべきだと
思います。

〔所感発表〕

教育現場に接して

服部地区 栗野 広 雅



栗野広雅さん

悪さ、元気のなさに
驚いております。

職場の先輩教師
も、ここ五、六年前
と今とでは、あきら

先日、本屋さんで石原慎太郎氏
の記事を読みました。高校生の
援助交際をとりあげて、その淵源
は日米関係のあり方に原因がある、
と指摘していました。事実のほど

は分かりませんが、氏は別の本でも、法華
経信仰の重要性を主張していました。私は
現在の表面的混乱も、その原因はもっと深
いところにあつて、大聖人の教えでしか、
救いようがないのだと実感しました。

かに教室の雰囲気、変化していると言ひ
ます。教育委員会では、所持品検査の励行
とか、六・三・三制の学校制度を見直す
とか、いろいろ教育制度の改善を提案しては
おりますが、私は対症療法ばかりが目につ

まだ未熟な新米講師ですが、ご住職の御
指導を聴聞しながら「家庭教育の重要性」
と「法華経を基盤にした教育」の二点を信
念に、今後も頑張るつもりでおりますので、
皆さまよろしくお願ひ申し上げます。

〔所感発表〕

愛犬が臨終にお題目を唱えた

緑丘地区 小林 燐 代

私は若いときに、信仰の必要性を父から自然に、教えられました。理屈っぽい娘に、人の生き死には朝目を覚まし、夜

眠ることと一緒だと言ひ、一生懸命に信仰すれば、必

書を読んでも、理解のできなかった生き死にの問題が、水がスーッと流れ込むように、納得できたのです。

また八十五歳になる母も、勤行・唱題を欠かさぬ人ですが、長いこと続けた生活のリズムは、周辺の者にまで影響を与



小林燐代さん

えて、知らず知らずのうちに信仰を基本にした生き方を教えてくれているのです。

実は先日、十五歳（ハ人寿九十歳）と長生きした、愛犬が亡くなったのですが、

この犬は勤行の好きな犬で、必ず勤行中は膝の上に座っていたのです。だいぶ弱

をしたら、翌日はきつと幸せな一日がおくれる。人間は幸せになるために信仰をするんだ、というように、肩ひじ張らず、形式張らない話に、それまで難解な哲学

つてきて、私がご本尊様の前に座つたら、膝の上でハッキリとナンミョーホーレンゲキョーと唱えたのです。そんなことがあるか、と思われるでしょうが、私の耳には実にハッキリと聞こえたのです。その後で、大きくフーッと息を吐きましたら、犬の身体がグニャグニャに柔らかく

なつてしまひまして、息をひきとつたのです。私は人の臨終に立ち会つたことはありませんが、御書にあることを、まさに愛犬が身を以つて示してくれたと信じています。飼い主に安心を与えてくれたのだと、思いました。

実はこの日は、ダンスのレッスンの日でしたから「犬が病気なので、今日の練習は中止にします」って連絡を流したのです。だから来週はみんなが、犬の様子を心配してくれて、必ず話題になりますから、そこで私はこの話をします。するとこれは折伏というか、下種になるわけです。

学会時代の折伏でなく、自分が体験したことを、真剣に訴える、これが折伏ではないでしょうか。自分が感動を失つたら、決して人には話ができないと思ひます。私はその感動を、ご本尊様の素晴らしさを、愛犬から死をもつて教えられたと思つています。ありがとうございます。



〔所感発表〕

幸 せ に 感 謝 し て

旭丘地区 宮 下 留 代

昨年もお話させて頂いたので、今年もまた話せと言われて、遠慮したのですが、やはりこれも信心だと思い、少しばかりお話しします。

私が四十四・五歳の頃、突然に出



宮下留代さん

こしたから、病気に なったのかなあ」な なんて思い、一生懸命 にお詫びして、題目 を唱えました。それ は大手術だったので すが、無事に手術も 終わり、全快できま した。

正信会になってか らも、昭和六十三年 に神戸ポートアイラ

血しまして、流産 かと 思 い き や、絨毛^{じゅうもう}上皮腫^{じょうひしゅ}と いう腸の病気で、開腹手術をしなくては 病状が全身にまわつちやう、命取りにな ると言われました。

その頃の私は、創価学会があまりうる

さく、折伏だ、座談会だといって、忙し いばかりで大変でしたので、止めようか と思っていたのです。でも入信する時、 このご本尊様を離れたら、地獄行きだと 言われたことを思い出し、「ああ、これ ではないけない、止めようなんて考えを起

来てくれました。

でも私はそんなことを、知りませんで したから、毎日一生懸命にお題目を唱え ていました。苦しいのですが、一日に三 千遍のお題目を唱えようと決め、指を折 り、数珠を繰り、只ひたすら唱題し祈り ました。途中で咯血したりしましたが、 返ってこれで悪いものが身体の外に出た と考え、およそ四ヶ月ほど入院しました が、検査では一度も菌がでることなく、 無事に退院できました。

私は今年で、八十六歳になります。入 信以来、五十六年になります。いろい ろなことがあつても、いつもご本尊様を 信じて、実行してきたのです。そして今、 肺、心臓、胃腸、腎臓、脾臓と、内臓の どれ一つとつても、悪いところがありま せん。全身健康です。

ンドで、第十三回法華講全国大会があつ た時も、風邪がもとで咳が止まらなくな り、何度も痰^{たん}の検査をして、豊中市の刀 根山病院に入院しました。後で聞いた話 ですが、肺ガンの疑いがあったそうで、 主人は「もう母さんはダメかも知れな い」との思いで、毎日病院にお見舞いに

ただ少し忘れっぽくなり、目がうるみ、 耳が遠くなつて、みんなに迷惑をかける ことがあります。それはお許し下さい。 主人はもちろん、娘も孫も私を大事に してくれれますので、大変に幸せです。毎 日ご本尊様に感謝しております。

ありがとうございます。

恵日だより

節分会

二月三日（火）午後七時

これまでの大寒が終り、立春が始まる豆年越しのこの日は「冬陰の殺気が去り、春陽の生気が到来する」ともいわれる。まだ余寒の残る定刻ちかく、善男善女が頬を赤くして山門をくぐる。如法に進められた法要は「而説偈言」で馨がなり、ご住職が四方に豆をまくと、引き続き執



「福は一内。福は一内。」

事と講頭で、本堂の内外に豆がまかれた。今年も参詣者に年男・年女はいなかったが「妙の一字はよく毒を変じて薬と為す」のごとく、節分詣でに厄年のご祈念をする人もあった。

読経の後ご住職から、現在の寒さの中にすでに将来の暖かさが育まれているように、信仰も目先の出来事に振り回されず、倦まず弛まぬ精進を、とのご指導がなされ、終了後には太巻き寿司や福豆、甘酒が振る舞われた。

興師会

二月七日（土）午後七時

翌朝にはお餅つきをひかえ、氷雨のそぼ降る悪天候のなか、篤信の檀信徒が集い、読経唱題がなされた。その後、日興上人のご精神から、我等が受け継ぐべき仏法の精神を学び、もってご恩徳に供える趣旨の法話があった。

内容は、富士門流の三宝（仏法僧）のたて方と、他門のそれを歴史のうえから比較説明。その違いは、天台・伝教が像

法の立場で読む法華経と、大聖人が末法の立場で読む法華経の違いにあり、正しい読み方を感得したのが日興上人である。

また、大聖人ご一代においても、序分、正宗分、流通分のたて分けがあり、それを正しく理解し法義をたてたのが、常随給仕された日興上人で、我等は信の一字で、これを受持するのが信仰である。

併せて、身延離山の正当性が往古には他門でも理解されていた例。京都の祇園祭も法華衆徒が始めた行事であること等、参詣者はみな熱心な面持ちで聴聞した。

餅つき・子供会

二月八日（日）午前九時

久しぶりのお餅つきは、春先のきまぐれ天氣に翻弄されながらも、集まった子供達のみならず、前日から準備に精出した婦人部や役員までも、充分に楽しませる行事となった。

今までは薪を燃して、餅米を蒸したが、



「よいしょ。」私にもできるよ

「ああ、そうやるのか。簡単、簡単、まかせといて。」

わった。
年部の主催で子供会で賑

童達は客間に集まり、青
読経唱題が終ると、児
タンペタンと餅をついた。

集まった児童は、大人が
持つ重い杵に、脇からし
がみつくようにして、ペ
楽しんだ。中でも朝から
幕のように吹き上げ、み
な童心に還って餅つきを

者であった。
抜けるような青空が、
数分後には曇混じりの曇
天となり、時折吹き抜け
る突風は、餅取り粉を煙
息のあがる青年をしり目
に、安定したペースで杵
を振るうのは、熟年経験
者であった。



昔取った杵柄！

お知らせ・ご案内

一、一泊研修会について

四月十八、十九日に予定した、興風談
所での一泊研修会は、諸般の事情から、
中止にいたします。なお、一泊研修会の
実施については、変更か中止かを今後も
検討のうえ、発表いたします。

二、新郵便番号への移行について

郵便番号が七桁制になり、宛名シール
も新郵便番号を表記しましたが、もし郵
便番号、住所、氏名の表記等に、間違い
がありましたら、ご面倒でもお寺か、講
籍係（寺川）までご一報下さい。

三、お彼岸のお塔婆申し込みについて

お彼岸の塔婆申し込みは、早めにお願
いします。

三月の行事

- 一日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会
午後二時 お経日
- 七日(土) 午後二時 広基寺お講
- 八日(日) 午後一時 お講・役員会
- 十三日(金) 午後一時 お講
- 十五日(日) 午後一時 合同地区総会
(庄内・川西・蛍池)
- 二十一日(土) 午後一時 春季彼岸会法要
- 二十二日(日) 午後二時 法華経講義
- 二十九日(日) 午後一時 合同地区総会
(大阪・高槻・箕面)
- 三十日(月) 午後一時半 旭丘地区宅お講
(吉田宅)

※三月一日の継命新聞の発送は
『神戸・榎本』なび新聞区版

【弥生詠草】

ホウ
ホケキヨウ
法華経 鶯の声に 目覚めたり仏とともに 今日を喜ぶ
〔松間 卓〕



六十路近き人々を今も孤児と呼ぶ貧しき政治に怒りこみあぐ
子の罪は親自らの罪なるとう思いに生ききしわれらなれども
〔橋本 圓子〕

古式衣裳 笙ひちりきの演奏に君が代始まる 長野オリンピック
土俵入り 力士らの姿見事なり 世界にアビール 日本の国技

恵日

平成十年三月号 通巻三十七号
平成十年三月一日発行

編集兼 菅野 憲道
発行人 菅野 憲道
発行 恵日編集室

〒563-0057 池田市榎木町一〇〇 源立寺内
TEL (〇七二七) 五一三三三五
E-Mail: genh@wombal.or.jp
BBS: PXH05170 (NIFTY) BMC92733 (PCVAV)